

産業能率大学

→ SANNO UNIVERSITY

高校への教育改革支援として 新たに開発された 「主体的学習者育成プログラム」

高校教員向けのさまざまな教育改善支援で知られる産業能率大学が、今、新たに開発し普及に取り組んでいるのが「主体的学習者育成プログラム」だ。目的は、高校の探究学習において「壁」となっている「生徒自ら問いを立てる」を可能にすること。そのプログラムの内容と成果とは一体どのようなものなのだろうか。

取材・文／教育ジャーナリスト 友野伸一郎



フォーラムでの「主体的学習者育成プログラム」実施風景

大学でのPBLの経験から生まれた 主体的学習者育成プログラム

産業能率大学は、2006年に始まり2017年度で11回目を迎えた「キャリア教育推進フォーラム」や「アクティブフォーラム」、1996年に始まり既に20回を数える「授業力向上セミナー」など、高校の先生方を対象とした教育改善支援に力を入れている。その産業能率大学が、今、新たに力を入れているのが、「主体的学習者育成プログラム」の開発と普及である。

このプログラム開発の契機となったのは、同大学が続けている高校への教育支援のなかで、探究学習を始めた多くの高校が「生徒が自ら問いを立てる」ところで躓いていることに気づいた点にある。同大学では、自大学の教育においても多様なPBL授業を取り入れ、「学生が自ら問いを立てる」教育を実践していることで知られるが、それを踏まえて高校における探究学習に最適化されたプログラムとして開発したというわけである。

しかも同大学は文科省の大学教育再生加速プログラム（AP）に採択されているため、このプログラム開発は、その

高大接続部門での取り組みとしても位置付けられている。

問題意識がなければ 「問い」は生まれてこない

どのようなプログラムなのかを紹介しよう。

「自分で問いを立てられない、というのは高校生に限ったことではありません。大学のゼミで学生が何かテーマを設定し、調査研究を行う際には、『自ら問いを立てる』が必要になりますが、学生から『この問いで合っていますか?』とか『これでいいですか?』と言われて驚くこともあります。『このテーマならどのような切り口から研究を進められますか?』とか『この研究を進めるにはどのような調査を組み立てればよいですか?』という質問ならいくらかでもアドバイスできますが、残念ながら『この問いでいいかどう

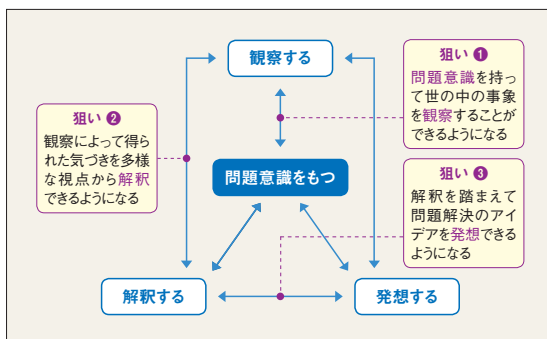
か?』は、私には答えられません」

こう語るのは、本プログラム開発者の同大学経営学部の齊藤弘通准教授だ。「彼らは『君は何を問いたいのか?』という質問に明確に答えられないのです。なぜなら強い問題意識を持っていないからです」

だから、主体的な学習者とは「自ら考えて行動できる人」と定義し、本プログラムの開発はスタートしている。プログラムは100分の授業2回で構成され、1回目は問題発見編、2回目が問題解決編である。ここでは、問題発見編を中心に詳しく紹介していきたい。

日本では、多くの若者は物質的には

図1 主体的学習者育成プログラムの狙い



豊かな生活を安穏と享受しており、生活から矛盾を感じて問題意識を研ぎ澄ませていくというケースは少ない。しかし、実はその安穏と過ごせる豊かな生活の底には、どんな問題が潜んでいるのか。それを発見する、というのがこのプログラムの核心を構成している。

図1で言えば、「観察する」⇔「問題意識をもつ」を往還させるところが最初のポイントだ。

食事の写真から 何を読み取れるか

具体的なプログラムの中身に入ろう。

次の2枚の食卓の写真から、あなたはどんなことが読み取れるだろうか。架空の事例として、違和感を覚えるような食卓写真をケース用として用意したものである。生徒たちは「生活科学研究所」の研究员になったつもりで、同様の写真10枚ほどをグループで見て、その背景にどのような問題がありそうかを付箋に書き出していく。例えば朝食であれば、「野菜がない」「朝からコンビニで買ったものだけ」「テーブルではなく勉強机で食べている」「一人で食べている」などがすぐに思いつく。

夕食であれば、「コンビニで買ったものが並んでいるだけ」「手作りのものがない」「野菜が少ない」などがすぐに思いつくかもしれない。



朝食の写真



夕食の写真

そして、他のグループの付箋を見て回ってヒントを得て、付箋を増やしていく。

さらに、グループのメンバーは「栄養学」「環境学」「教育学」の専門家に分かれ、それぞれの専門分野の内容について書かれた「情報シート」を読み、その視点から問題点や疑問点を付箋に書き出していく。

ここでは表面的な疑問から踏み込んで「加工食品ばかりで栄養の偏りや添加物が懸念される」「プラスチックなどのゴミが一食当たり大量に出て、環境負荷が大きい」「家族のコミュニケーションが成立しているのか」などといったより抽象度の高い疑問が生まれてくる。それらの問題点をグループ内で討議して、考えをまとめて発表し、最後に振り返りを行うのである。

知識と視点があれば もっと深いことが見えてくる

実は、彼ら高校生も実生活において、この写真と同じような食事をしていたりする。写真を単に即自的に眺めただけでは疑問も生じない。一步引いて見ることで見えてくることがあることに気づく。しかし、それはまだ思い付きの段階である。次の段階で「情報シート」が渡され、それを読むことで専門知識があるともっと深く問題が見えることを経験する。そうすると付箋の数も劇的に増える。それは生徒たちが視点を手に入れたからである。



付箋に書き出した様子



他グループを見て回る様子



経営学部
齊藤弘通准教授

そして、この「視点が手に入ると、もっと深く世の中のことが見えてくる」という感覚を生徒たちが経験することが重要なのだ。そうすると、「もっとニュースを見よう」「新聞を読もう」「今までと違うジャンルの本を読んでみよう」という知的欲求が生まれるからだ。そうした知的欲求をもち、問題意識をもって考え行動できるようになれば、探究学習において、自ずと質の高い問いを自分で立てることができるようになる。

そして、これは「いい大学に入れる」「いい就職につながる」というような生徒たちへの外発的動機付けとは異なり、生徒たちの「もっと知りたい」「もっと深く考えたい」という内発的動機付けへと結びつくのである。ここまでが、第1回の「問題発見編」だ。

第2回の「問題解決編」では、ある仕事と育児との間で揺れるワーキングマザーが主人公のビデオを見て、第1回と同様に問題発見をするとともに、今回はその先の解決までを考える。

問題の解決と言っても、前提となる知識が浅ければ、安易なレベルに終始してしまう。「短い時間で簡単に料理できるものを開発する」といった発想ではなく、主人公のワーキングマザーが抱える、「会社では信頼されるような仕事がしたい」「子どもにはちゃんとした料理を食べさせたい」「保育園の送り迎えは自分だと決まっているのか」等々のジレンマにまで踏み込み、思考や仮説の抽象度を上げていくことが課題である。そのために、多様な着視点、複眼的な解釈を促しつつ、では一体何が最も本質的な問題なのかを掘り下げていくように「問題解決編」は設計されているのである。

「問題解決編」では、生徒の知識前提

の量や深さが仮説構築や解決のアイデアに大きく影響します。しかし、そこが足りないということを生徒たちが自覚し、知的欲求への刺激となることも本プログラムの狙いです」と齊藤准教授は語る。

実施高校では 生徒に大きな変化

このプログラムは、本誌キャリアガイドンス2017年12月号でも紹介されているように、群馬県立桐生高等学校で実施されているのをはじめとして、川崎市立幸高等学校、沖縄県立八重山高等学校など、既に全国のいくつもの高校で実施されている。

その成果はどのようなものか。図2は、桐生高校におけるプログラム受講前後の生徒たちの意識の変化である。

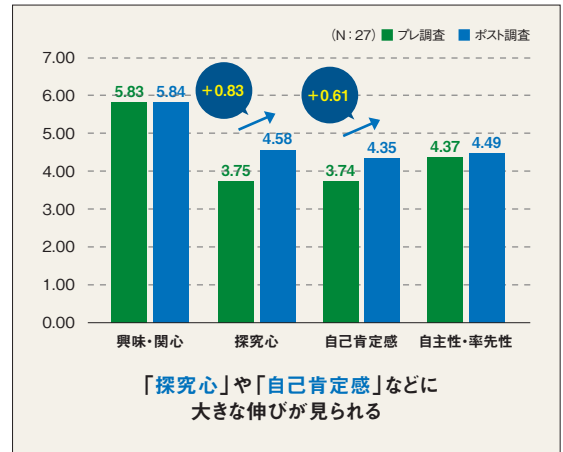
主体的学習態度を構成する要素のうち、興味・関心、探究心、自己肯定感、自主性・率先性を取り上げ、1要素につき3

つの設問を用意して、プログラム受講前後の2回、7段階自己評価のアンケート形式で調査を実施したものである。

「興味・関心」は桐生高校の生徒は当初より高いため変化は見られないが、「探究心」「自己肯定感」で大きな伸びが見られる。

また、生徒たちの感想では、「一番驚いたのは専門家という意識をもつだけで視点が広がったこと」「『批判的』とは、自分の意思的な批判ではなく、『他に解がないか』を考える『批判』であることに気付けた」「『自由』を『小分け』することで、とりとめのなかった思考も論理的にすることができた」などのコメントが見られる。生徒たちが自

図2 桐生高校の調査結果



分の成長を実感できた証左と言えるだろう。

「主体的学習者育成プログラム」の他の実施高校でも同様の結果が得られている。

探究学習で悩みを抱える多くの高校にとり、「主体的学習者育成プログラム」は大きな福音となるのではないだろうか。

導入事例

あの生徒がこんなことを！ 生徒たちに想像以上の変化が生まれました。

桐生高校では「探究基礎」という科目の中で「学びの技法」という授業を行っています。この授業を進めるうえで、生徒たちがいかに「自ら問いを立てられるようになるか」が重要だと気づき、産業能率大学の「主体的学習者育成プログラム」を導入することにしました。

まず1学期に産業能率大学の杉田一真先生に、生徒を対象とした模擬授業を行っていただき、私たち教員がそれを見学しました。そして、2学期には見学した私たちが実践者となって1年生に授業を行いました。

私が行った授業は問題発見編でしたが、探究においてテーマを決めるのに役立つと授業をしながら感じました。例えば食事の写真をめぐる問題点の書き出しですが、出尽くしていると思っても、まだ別の視点から見ると問題が見えてきます。その点で、ある程度知識をインプットしたうえでさらに問題を見つけるといった進め方が有効だと体験することができました。

授業の冒頭では、「主体的学習者育成プロ

グラム」の目的をかなり強調しました。社会で求められている能力を身につけるためだ、ということ時間をかけて説明したわけですが、それがないと単に「面白い授業だった」ということで終わりがかねないからです。また生徒が脱線してしまっても、目的が共有できているので、必ずそこに戻ってくるようにできました。

生徒たちは、真剣に取り組んでいました。真面目な生徒はもちろんですが、普段は授業中に活躍できていない生徒も周囲をうならせるような独特な視点で発言をしているのが印象的でした。

生徒たちの感想を読みましたが、想像以上に自分の考えたことを自分の言葉で書き込んでいます。しかも中身が深い。これには驚きました。また、普段は不真面目だと見えていた生徒が信じられないほど自分のことを分析していたりして、この授業から強い刺激を受けたことがわかります。このプログラムは本当に意義があると、教えた私たち自身が実感できました。

探究で身につけた知識や考え方は、実社会で役に立つはずですから、他の教科の授業や部活でも役立つものだとは考えています。私自身はテニス部の顧問をしていますし、自分自身も試合に出ます。テニスの試合では、まず練習の時から相手を観察することが大切です。試合をしながら、相手がこういうタイプだから、こうやれば得点できるはずだと仮説を立ててから実践する。そして得られたデータを基に、試合中に修正していきます。これは探究学習や理科の実験と同じなのです。このように答えが決まっていない問題を解決する能力を、実は探究学習では身につけているのだと思います。



群馬県立桐生高校
教諭
星野 亨先生